

「高山右近と日本二十六聖人」

カトリック高槻教会 高山右近顕彰特別委員会

カトリック高槻教会の聖堂は、今から 55 年前(1962 年)に献堂され、日本二十六聖人に献げられました。それ以降、当教会は二十六聖人の保護のもと、歴史を歩んできました。

今年、高山右近が列福により注目が集まる中、右近と二十六聖人が切っても切れない関係にあること、そして、この聖堂がなぜ二十六聖人に献げられたのかの意味を再認識する機会が与えられました。このことについて簡単にまとめてみました。

時は 16 世紀の後半、天下を統一しようとする豊臣秀吉は、その妨げとなるものを一切排除しようとしてきました。秀吉にとって、キリスト教の神は自分より上に立つとするキリスト者の信仰を認めることはできないものでした。秀吉がキリスト教とその信徒を迫害した 2 つの大きな出来事がありました。

1 つは、1587 年の「バテレン追放令」であり、秀吉は、キリシタンの柱石である高山右近にも棄教を迫りました。右近はそれを拒否したため、明石城主の地位を剥奪され、追放され、流浪の身となったのです。もう 1 つは、1597 年の「日本二十六聖人の殉教」です。秀吉は京都奉行の石田三成に命じ、宣教師とキリスト教徒を捕らえて磔の刑に処するよう命じたのです。

二十六殉教者は厳冬期、京都から長崎までの長い道のりを歩かされ、西坂の丘で磔となりました。実は、右近が、二十六聖人とともに殉教する可能性は極めて高かったのです。秀吉が作成を命じた「キリシタン名簿」の筆頭に挙げられたのはキリシタンの中心人物である高山右近だったからです。しかし、それを見た石田三成は「命を奪われるにも等しい領地の没収をされた右近に対して、今、事新しくキリシタンとして告発することに、何の意義もあるまい」と右近の名を消すように指示したのです。このことにより右近は、殉教を免れました。しかし、右近は、この時、自身の殉教を強く望んでいました。このことについては、歴史書に記されています。

この、右近と二十六聖人に共通した望みは、神の御心、つまり、福音に忠実に従おうとしたことです。それは殉教もいとわれないものでもありました。右近は二十六聖人のように磔の刑により直ちに命を奪われるという形ではなかったが、地位・財産・自由を奪われ、流刑に遭います。その中に生きるということは「死なない殉教」であり、いずれも、自分を捨てて神の御心に従うというところに真のいのちの輝きがあることを見出していたことは確かです。

「高山右近は、追放にたいして悲しがりもせず、むしろそのことに慰めなり喜びをすら感じたのは、デウスの教えにいささかでも叛くよりは、むしろいかなる危険をも甘受し、現世の財を喪失するをあえてし、死をも賭する固い決意を抱いていたからであった」とフロイスは「日本史」に記しています。

また、二十六聖人も、喜びのうちに殉教に向かったことが知られています。12 歳の少年ルドビコ茨木は、役人が助けたいから信仰を棄てるようにと薦めたが、それを断りました。また、13 歳のアントニオは、テ・デウム（感謝の賛歌）を歌う中を槍で刺され、殉教したのです。

二十六聖人の殉教後、右近は、1614 年徳川幕府によりフィリピンに流刑される前、長崎西坂の近くに半年ほど拘束されました。その時の右近はどのような思いであったのか。二十六聖人の殉教を

思いめぐらしたに違いないでしょう。右近は霊操を通し、神と対話しながら、その出来事の背後にある神の御心を見出し、フィリピンに向かったことでしょう。

高槻教会の祭壇の両脇、左に列聖100年を記念して彫刻家・舟越保武氏が製作し、西坂の丘に建てられた「日本二十六聖人殉教記念碑」のレプリカが掲げられています。また、右には、スペイン・マンレサ聖イグナチオ洞窟教会の中にモザイク画で描かれている高山右近の祈る姿を、新たに日本画で製作されたものが掲げられています。多くの人々が、この聖堂で祈ることにより、聖人・福者を通して神が働いたこと、今も、神が私たちの中にも働いておられることを、感じ取っていただければ幸いです。

「時のしるし」

カトリック高槻教会 清川泰司神父

二十六聖人は「死ぬ殉教」、右近は「死なない殉教」でした。奇しくも列福式が執り行われる、この時期に、遠藤周作の「沈黙」が映画化されアカデミー賞の候補に挙がりました。この映画により、「殉教」が世界の問題になっています。この映画は、「殉教」にある視点を与えていると感じます。それは、「殉教」よりも、頑固な現実の中で「神の御心」を懸命に生きようとした人々の輝き、そして、それよりも、殉教者の心に人間の思いをはるかに超えた、善性、愛、赦し、配慮、および憐みが無限である神がともにいてくださっていることを見出すのです。そして、この視点は、二十六聖人、そして右近に関わった神の豊かさを再認識させる可能性へと誘うのです。

現代世界の風潮は、自分さえよければという人間の欲望による支配を強められていると感じます。多くの方は、生活の豊かさを求める一方で、他者をいつくしむ力は弱められ、未来への不安から利己主義を強めているように感じるのです。世界は死に向かっているのではないかと感じるのは私だけでしょうか。今から約450年前、「死の世界」から「いのちの世界」、つまりすべての命は尊く、また、他者のために犠牲を払う、そこに「いのちの世界」があり、それに憧れ生きようとした人々がいたのです。そして、彼らに、その命の輝きに気づかせ、支えたのは、神だったのです。

福音に描かれる神は、本来、人と人の違いの豊かさを見出させ、弱くされた者が大切にされ、また、万物が大切にされる世界の実現を諦めません。そして、人間の罪を赦しながら育もうとします。そのような神が現代も生きていることを、キリスト者は信じミサにより希望をいただいています。

このような時代だからこそ、多くの人に、450年前、クリシタンたちを魅了した、今も生きておられる神と出会っていただきたいと切に願うのです。